



# 新美南吉と詩

Nankichi × Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。

## 牛

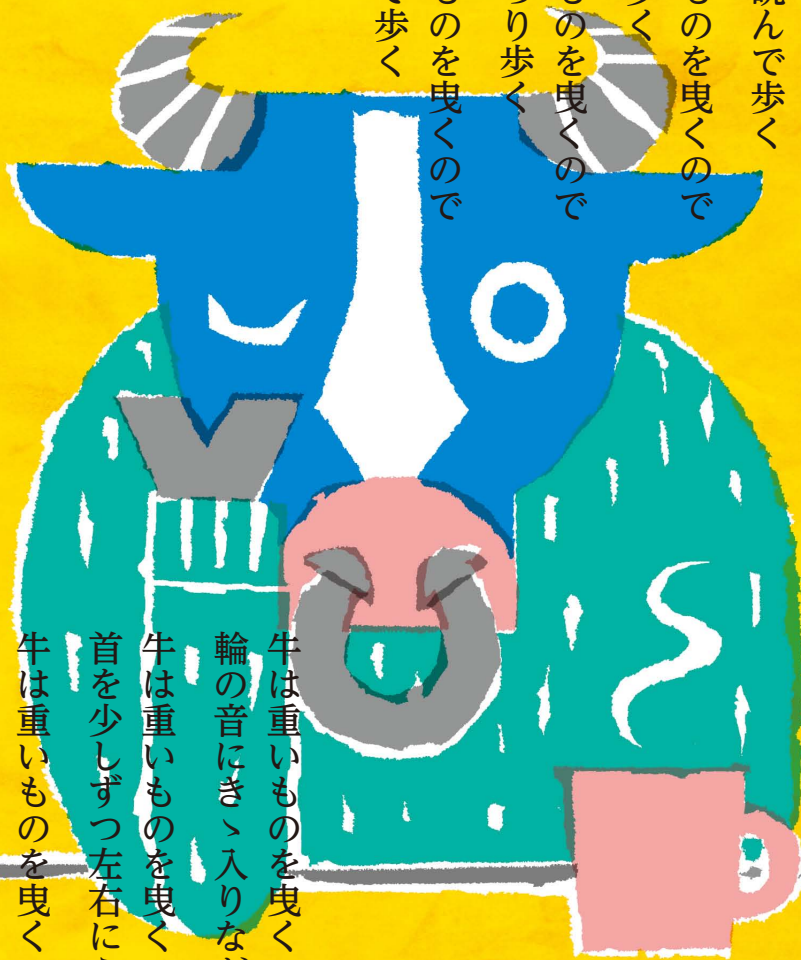
牛は重いものを曳くので  
首を垂れて歩く

牛は重いものを曳くので  
地びたを睨んで歩く

牛は重いものを曳くので  
短い足で歩く

牛は重いものを曳くので  
のろりのろり歩く

牛は重いものを曳くので  
静かな瞳で歩く



牛は重いものを曳くので  
輪の音にきき入りながら歩く

牛は重いものを曳くので  
首を少しずつ左右にふる

牛は重いものを曳くので  
ゆっくり沢山喰べる

牛は重いものを曳くので  
黙って反芻している

牛は重いものを曳くので  
休みにはうっとりしている

米良綾介 イラストレーター

1993年、愛知県生まれ。小さい頃から絵を描いて人を喜ばせることが大好きです。シンプルで可愛らしく、デザイン性の高いイラストレーションを意識して描いています。  
<http://meraryosuke.jimdo.com>

\*絵について\*  
詩の最後のフレーズが印象的だったので、休んでいる牛を描きました。

### 新美南吉



にいみなんさき  
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

### 解説

南吉は、自分が丑年生まれであった、という理由だけでなく、牛に対して特別の思いをもっていた。それは「百牛物語」や「和太郎さんと牛」をはじめ牛の登場する物語や詩を数多く書き残しているところからもわかる。

作者は、牛の内面まで見ているようだ。静かな瞳で、輪の音に聞き入りながら歩く牛。首を左右にふり、沢山食べ、食べたものを黙って反芻する牛。これはもう、ただの牛ではなく、まるで思慮深い心を持った

存在者のようだ。そして、ラスト。「休みにはうっとりしている」という結びが、これまでの重い牛のイメージを一気に開放し、ホッとさせる。心憎いばかりだ。

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。

解説者

### おしらせ

「でんでんむしのかなしみ」原画展  
～皇后さまと南吉～

【期間】11月9日(土)～

2014年1月13日(月・祝)

【場所】新美南吉記念館

平成10年、皇后さまは国際児童図書評議会インドニューデリー大会における基調講演で新美南吉の童話「でんでんむしのかなしみ」をご紹介された。本展では、大日本図書から出版された絵本「でんでんむしのかなしみ」(絵・かみやしん)の原画とともに、「でんでんむしのかなしみ」の自筆原稿、妃殿下時代にお読みになった南吉の詩「天国」のもととなった作品、平成22年の行幸啓時の写真などを展示する。